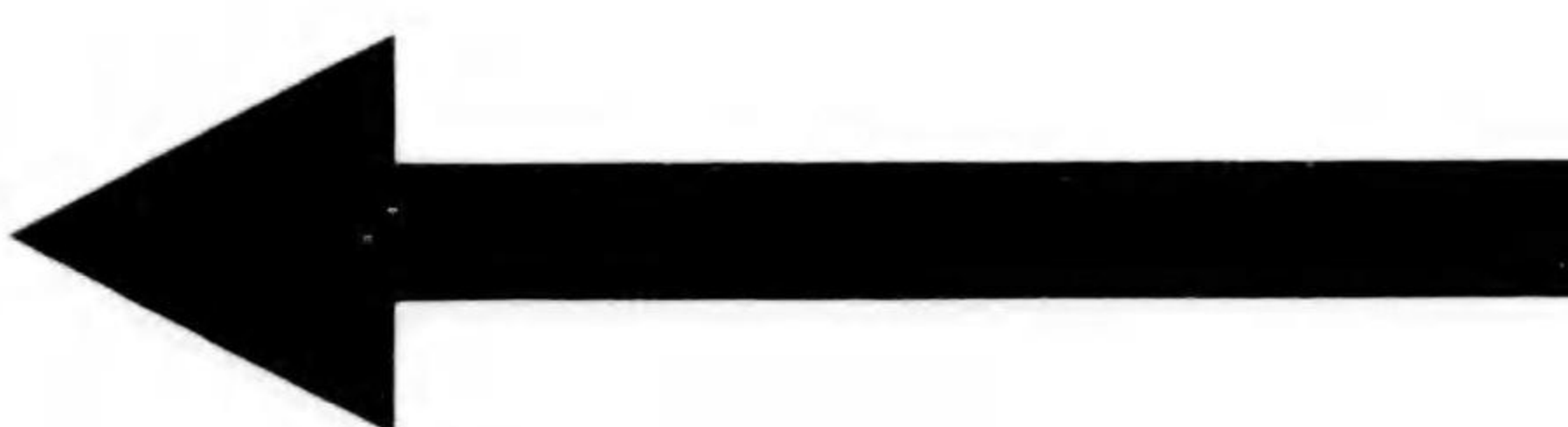


始



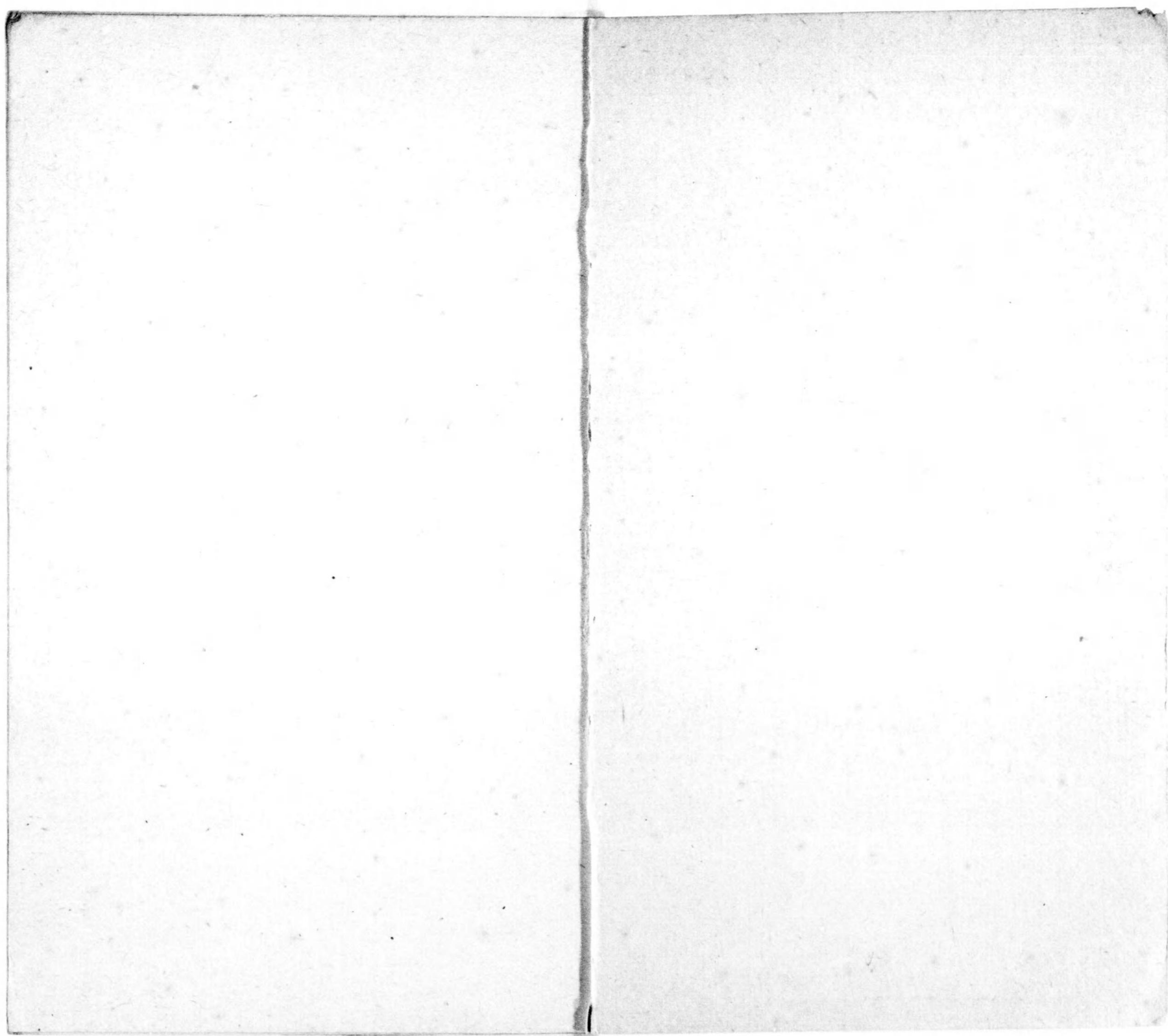
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁸/₇₀ 1 2 3 4 5

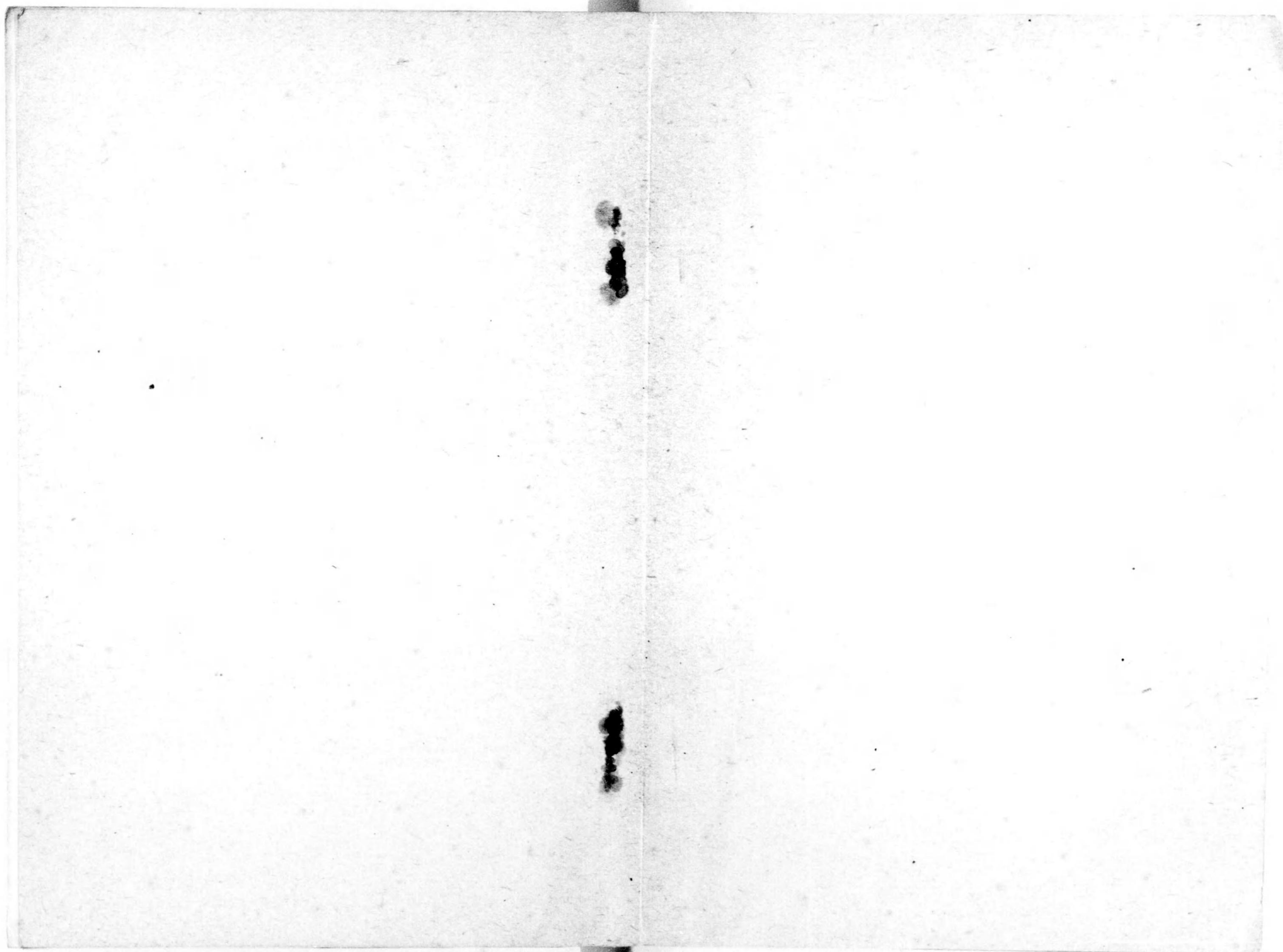
特

秦天集

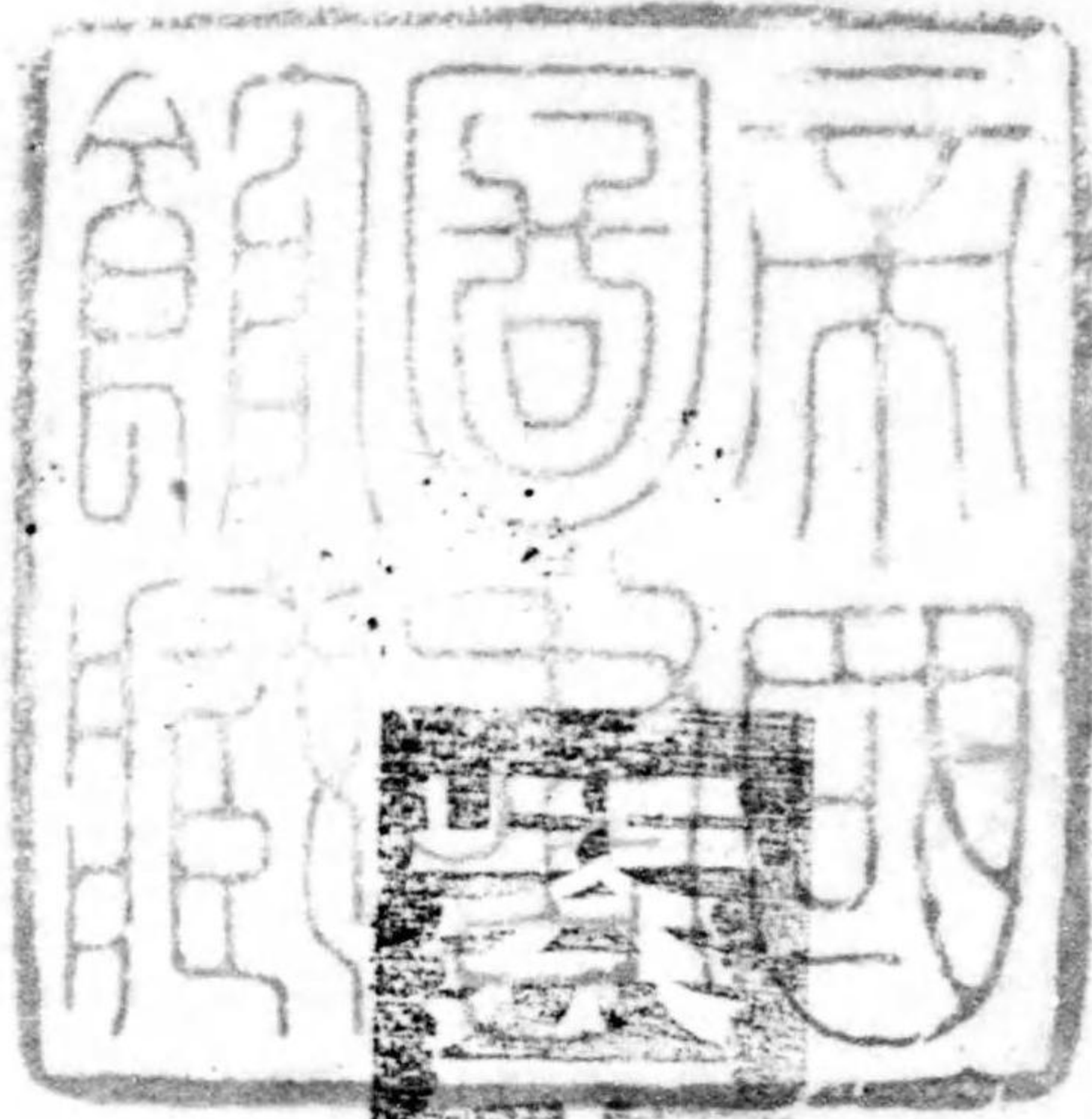
141







持100
146



大正
長詩集

大正
7.7.19
内交



序

長詩は遠き昔より存し、彼の増鏡大平記等に所々見ゆ、されど獨立せる長詩としては、明治十五年頃初めて生れし物なるべし、げに數年前迄は新體詩として次第に發達し來り、其頃迄は大低七五、五七等の口調を用ひたれど、現今はじに是等の口調も消え行きて、西歐の詩にや真似けん、字数に拘泥せず、所謂亂調とは成りしなり、余素より此時世に合したる亂調を物せんとは思ひしかども、遂々筆の進むが儘に書き行き、本書のみは數個の小篇を除くの外、皆唄ひ易き七五の口調

とに成し終ひぬ、されど我文運拙なからず、天尙數年の長閑なる生を得せしめば、次の卷よりは主として亂調の短かき詩を物せんことを誓ひ置かん。

元來長詩とは、我三十一字の和歌に厭き足らず、唐の詩に習ひ生れし物と覺ゆ、和歌は奥床しく旅等なしで、浮びしまゝの思ひを綴り、時折は徒然の棊りともなし、或ものは其短かき小さき一句の中に、良く天地の廣きをも眞に讀み盡すの概なきにあらねど、是を手にして唱ひ長き挾味に耽けらんとも、又我思ひを自由に歌はんことも欲せば、やはり是等の特長を尙幾層も多

く自由に含め得らるゝ長詩に若くはなし、英詩も唐詩も皆長詩なるに、我に獨り短かき和歌のみにては誠に彼に比肩すべき善き詩の出で來たらん事覺東かなけん、自今は我國にも其好者出で來り、讀む人をして古しむの元始時代や、又天上に昇りたる心地にも、仙境にも導びき行けよかし。

斯く余は詩として、此完全なる長詩の今後大いに發達普及せん事を望み、先づ其志にと本編を物せしなり、世若し我が意の如く成らしめば其後人の進まるゝ手導きとも成せよかし、乞ふ我が意を諒せられ、御愛

誦あれ

浪花江の寂しき庵にて

大正七年六月

紫天誌す……………

目次

我が妻	一
田面峠	五
天女の戀	七
同返しの歌	三
坊や	七
初恋	九
小狐	三
堇	五
健康の歌	九

樂しき此世

パ
ン

天然の歌

人
生

探勝會の歌

我が生地

櫻
花

梅
の
香

田
月

画
の
精

四
五

四
九

五
三

六
一

六
三

六
七

七
一

七
七

八
一

八
五

終業時

ヒマラヤ山麓の夕陽

立田姫

饗庭野の春

須磨の浦

千島海岸

シスカ河畔

熊
狩

山
縣
公

小
さ
き
足

九
一

九
五

一
〇
一

一
〇
七

一
一
三

一
一
九

一
二
五

一
三
五

一
三
九

一
四
九

死したる精兵

一五七

雉子獵

一七一

月神

一九一

◎我が妻

美し乙女は數あれど

我身の妻は未だになし、

我身の妻は今何所

花咲く彼の野にさ迷ふか、

塵濃き巷に惑へるか

何時迄そなたは見ねんのや。

山さね見ねぬ海原に

1 漂よふときも見ねやらず、

2 人跡絶わし深山に

迷ゆる時も束の間も

そなたを思はぬ時ないに。

今日も今日とて須磨の浦

夕暮月の影淡く

砂地を辿りし其時も、

あゝ涼しくて外に思ひは無けれ共

孤獨は何せにこないに淋しいか、

夢路に等しき我旅路

今若し君のましくて

互に手に手を取交はし、

共に苦樂を分か合ひ

楽しくつれ立ち歩みなば、

如何に愉快に有るならん。

迷ひ迷ひし我戀路

幾重振り裂く淡霞み、

早く願ひの光り見ね

出雲の神の現はれて、

4 我れが行くてを導びかれ



◎田面峠

(東嶺にあり)

町田の里を出でぬれば
舊幕時代の其儘の、
老松の並木残るなる
小坂の道を辿り初め、
谷又谷と問ひ上り
何時か山脊に出でし頃、
今來し方を見返れば
麓に入れる彼の道は、
5 さなぶら帯を引く如し

思へば十年の其昔
我未だいまだ年若く、
三本松の中學に
學びし頃の夏冬に、
或は日曜に我母を
親ひて故村を尋ねつゝ、
幾度び此所を越ねにしぞ
其越ゆる度思ふよう、
今は貧しき書生にて

雜木の下駄に襪縷袴
人前小さきのみならず、
此松林の山野にも
尙耻かしく通るれど、
僕も一個の男子にて
他人と同じく學ぶなり。
早く東都に遊學し
人十倍に勉強し、
末は大臣大將に
成つて古卿に錦着て、

年更けそめて此道を
再び通らん其時は、
數百金の衣も着け
供人多く従ふか、
或は馬車か自動車に
倚りつゝ通り山野をも、
驚かさんと誓ひてし
其大望は如何にせし、
今の此身の不甲斐なさ
年こそ遷りて體だのみ、

何時か小皺の寄つたれど
する事成す事知恵足らず、
親より受けし身代も
遠き昔に費ひ果て、
親戚知己にも見放なされ
今は暮しも繼ぐ糸、
され共年とて妻娶れば
其妻さねも三月経ぬ、
去月半ばの十六夜に
9 その両親の住まふなる、

10 今朝立出でし白鳥に

歸りて早も我をないがしら、

外に男が出来にしと

怒れど如何に詮もなく、

甲斐なき命長らわつ

漸やく此峠に來たるなり、

弱きの亡ぶ世の習ひ

愚者は劣るが誠なり、

十年の間問はざりし

山よ汝も笑はなん、

林よ汝も可笑しきか、

思へば昔の其友は

同じ東都に學びつゝ、

博士に成りしも幾人か

早佐官に成りしも許多あるなるに。

峠の茶屋で老婆の賣る

せめて晩茶と駄菓子にと、

目指す老婆の不愛相に

11 持てなす風に腹立ちつ、

12 心慰むる間もなくて

麓で後れし人力車、

三臺丁度來かゝりて

等しく前に楫棒置き、

三人の客は裏に入り、

床の上にと座を占めぬ、

見れば二人の親達と

今年頃の美人となり、

美人の顔を良く見れば

確か見覺は有る顔と、

思ふも道理さながらに

某友人の顔其儘なり、

親の面も老けたれど

昔尋ねし時に居し、

其友の親に相違なし。

聲掛けんとはしたれ共

年甲非もなく貧困の

今の此身の耻かしさ、

一言の挨拶も得なさず

13 こつそり此所を立出でぬ。

气拔けし足並ほとくと

山の原道下るれば、

疾風の如く彼の車は通り過ぎ

晩夏の緑山に満ち、

松間の風は颯々こ

憂ひに沈む此僕に、

何處ともなく神の御聲あり。

「憂ふる勿れ

神は汝を守るなり、

働け汝は食へるなり、

互に愛する女を娶れ

さらば汝も妻は持てるなり、

人の立身を妬む勿れ

立身するが人生の目的に非ず、

廣く世間を見渡せよ

下層社會の人の多からん

神は下層社會の人を多く造りしなり、

悲しみ多きとて神を恨むな

他人も汝に纏る悲しみは有るなるぞ。』

御聲は微かに消ぬにけり、
見上ぐれば空には低き雲早く
蟬の聲木の間にかまびすし。



◎天女の戀

靖國社頭の朝霧は

さ迷ふ人影おぼろにて、

誰れともわかで行きかへり。

彼の玉垣に腰掛けて

今し憇へる生徒達、

中なる一人の美少年

年は二八か三五なん、

おや、あれは佐竹さん

17 ちらりと見合す顔と顔、

嬉しや先には知らぬらし、
見れば大きゆなりました
貴郎と一所に神田なる、
錦の園に通わりし
去年の春の今日でした、
二階で博物習ふた時
わたしと貴郎は同じ席、
あの愛らしい御顔で
ちらりとわたしを見なすつた、
貴郎は御顔を紅ひに

わたしは何にか耻かしく、
其時よりは煩腦の
戀の泉の絶えまなく、
今日は昨日に増す思ひ
思ひはそなたに通ふたか、
そなたと見交はす顔毎に
そなたは笑みを湛たえます。

貴郎は美男にましまして

ごんな美麗な女でも、

20 貴郎を好かぬ者はない、

とても適はぬ戀なれど

せめてわたしの思ひやり、

わたしを度々見て下すつた

数ある御禮の一言は

こゝより歌で申し上げます。

「櫻の花は美くしい

わたしはあなたに惚れてゝよ」。

櫻の枝をた折りては

極めて臭いで見たなれど、

此花よりも人の花

そなたと一所に遊びたい、

そなたは泣いても美くしい

憤れる顔も美くしや、

笑へば餘り美しく

とても妾が目では見られません。

そなたは華族の御子故に

21 賤しき身分の私しは、

とても此世じや添はません、
 私しは死んで生れ来て
 又々死んで生れ来て、
 千万べんも生れ来て
 せめて一たび生き残り、
 あなたの様な美小年と
 一生添ふて死にたいわ、

「櫻の花は美くしい

わたしはあなたに惚れて、よ。」

◎同返し之歌

櫻の下の豊子嬢

すげなく無情に此僕は、
 知らぬ風して居るなれど
 僕も其所迄足もなく、
 飛んで行きたい気はすれど
 友の居る前耻かしや。

外に女は多かれど

23 不思議や、神が知らすか未来をば、

24 僕は外に愛する者はない

豊さんより外に愛する者は持たんのや、

僕も歌で返しましよ、

『星より多き櫻花

中なる月の豊子さん、

世界の人は数多く

彼方此方に騒げども、

二人の心一つなる

君と僕とは蝶と成り、

春の草花夏の百合

菊や紅葉と競ひつゝ、

楽しい此世の初旅路

いざや是より昇りましよ。



千早ふる、岩戸神樂の昔より、

女ならでは、夜の明けぬ國◎

立春や、鏡の如き、伊勢の海◎

来て見れば、左程にもなし、富士の山◎

(失名)

◎坊や

(子守歌)

坊やは……

なせにそんなに可愛い、の、

坊やお年は十三や

洋服姿の愛らしさ、

一目で目さむる仇姿

何所迄坊やは美しの。

そして心の優しさは

27 此世に在す御開山、

うそ偽りも持たずして
ほんとにわたしを好かしやんす。

他に恨みは無いけれど

坊やが女子に非ずして、

熙ての姫や夕霧に

優る御姿持ちながら、

こんな仲よい私に

永春添はして下さらぬ、

それのみわたしは泣きまする。

◎初戀

嗚呼迷ひにき愚なる余は

學ぶとすれど學ばれず、

思はざらんも浮み出ず

君が御姿一時も、

我前離る時はなし

げに斯く迄も戀なせる、

君が真心余は知れり

我が真心も君知らん。

行かんとすれば河ありて
 我れが行く手を横切るなり、
 さらば山路を辿らんも
 彼の恐ろしき絶壁は、
 無情に遠く聳立てり。

河を渡るに舟もなし
 夏の來ぬ間に浅き瀬を、
 渡り行かんとあせたれど
 唯溺れんとせし計りなり、

嗚呼天も無情なり、
 斯くも腦める此身をば
 見捨てゝ行くは無情なり。

漸て秋にと成りぬれば
 幸ひ彼岸に至る共、
 時は昔に立替る
 花を落せし櫻木を
 打眺めて何とせん、

32 跡を見んのみ跡のみを◎

學びやの、ころあひたる、我友と、

つれだつ旅は、樂しかりけり◎

失名



◎小狐

庭に隠るゝ小狐の

人なき時に夜出でゝ、

秋の葡萄の木の蔭に

忍びてぬすむ露の房、

我月蔭に驚ろきて

逃げ惑ひてし昨日の夜、

上ればつたの彼方より

驕ぎて落ちし今日の宵、

33 野に揺る篠は恐れねど

さすがは人の住家なる
 此里人の口恐はし。
 戀は狐にあらね共
 君は葡萄にあね共、
 人知れずこそ忍び出で
 君をぬすめる吾が心◎

◎ 堇

岸に気高き蒲英公や
 畔を色取る蓮華草
 今を盛りと咲き競ふ、
 此所に堇の花一つ
 遠ち近ち友に誘はれて
 今日より咲ける床しさよ、
 滴り落ちん紫紺色
 鬼神を泣かす色香あり。

折から舞ひ來し蝶一つ
 香に酔ひ花に迷ひけん、
 嬉しそくに舞ひ狂ふ
 小蟻も花に上り得て、
 同じ色香に迷ひてし
 空をも得見ず停ずめり。
 一つの花に蝶と蟻
 小蟻は花を守り顔に、
 胡蝶は花に酔ひ顔に

舞へどもく術べぞなき。

花は小蟻の爲ならば
 胡蝶の舞を如何せん、
 花は胡蝶の爲ならば
 小蟻の足を如何せん。

今し止りし蜜蜂は
 胡蝶や蟻に氣も呉れず、
 己が花よと思ひ顔に

したゝか蜜をみさぼりて、
 ブブンの酔音もろ共に
 何所ともなく飛び去れり、
 蝶と小蟻の影見ねず
 二人は何所惑ふらん◎



◎健康の歌

一

騎る平家は亡び行き

素仆の源氏の起り來る、

是ぞ古今の習はしぞ

智恵のみにては世に立てず。

二

日光知らざる蔭の草

花咲く春や茂る夏、

秋の實りも知らずして

可弱わき其身を託つらん。

三

託つもあかじ汝れが身は

此世の自然に叛くなり、

汝れが祖先は野生なり

如何で日蔭で育たんや。

四

人も昔は晝は野に

夜のみ家に住ひしに、

日蔭で遊ぶ人々の

弱きを託つも是非もなし。

五

雲越へ高きに出で、見よ

なごて月に隔てある、

神は生くべく人生めり

如何で弱きを造らんや。

六

吾等が腕や足を見よ

筆持つ手には大き過ぎ、

座るに足は強過ぎん

野に出で行くぞ人の道。

錦を飾る醜女より

襪褌に包まる美人こそ、

男子は愛し好まなん

まして色よき肉付きは。

八

筋骨返まじき丈夫の

如何に頼もしく美しくしき、

君等は御國の寶なり

君等は世界の花なるぞ。

九

健全の體に神宿る

強き此身を楯として、

荒波此世を弄そぶ

世界を楽しく漕ぎ行かん。

十

心も樂し身も愉快

神の指圖のまに／＼に、

自然の道を辿りつゝ、

いざや進まん諸共に。

千よろずの、軍なりとも、言擧げせず

取りて來ぬべき、男兒とぞ思ふ◎

(萬葉集)



◎樂しき此世

出づれば山野の土の面

黄又赤と色をなし、

草や木の葉も緑りして

美しからぬ物ぞなし。

わけて美しくし春の花

夏は涼しく枝葉満ち、

秋は萬物實を結すび

45 冬は壯者も休むなり。

米麥豆菜は野に満ちて

川には鯉鮒鰻住み、

海は鯛鮪鯉鯖

空にもあまたの鳥住みて

我等が食をもてなせり。

鳥の鳴く音や鹿の聲

愛らし小供の叫ぶ聲、

怒るも頼もし男子の聲

泣く虫の音さね興あるに
何せに吾等は悲しむぞ。

手足痛むも病ひにて

風ひきくしやむも病なり、

まして心の悲しみは

病でなくて何としよ。◎

鎌倉や、み佛けなれど、釋迦牟尼は

美男にまします、夏木立◎

晶子

外蔭着て、巨燧に温たる、歸省かな◎

失名

◎ パン

汝曹パンを得んがため

若く苦しみ脳めるぞ、

彼の空飛ぶ鳥を見よ

稼ぐ事なく脳める事なし、

されど天は彼が胃を満すに足る

食物を與へあり。

そは彼れ天分を守る故。

汝曹唯良く

49 己が天職に忠なれよ、

50 さらば汝が稼ぐ所に

天はパンを與へあり。

汝曹暇あらば

パン樹を住家の邊りに植ゑ置けよ、

されば恵み深き天は

神の與へし働くべき手、

歩むべき足をさね

そが衰弱を恐る程動かさず共、

天は尙吾等に美味として與わたる

其最上の食を與ふるなり。

嗚呼汝曹等

何ぞ不平にして悲しみ深きぞ、

汝曹等は彼の枝に囀ねずる

今日は此所、明日は彼所と、

戯むれ食を朮むる

小鳥にさね笑はれなん。

◎ 薪負ふ、人影長き、冬田かな

◎ 谷住勉

木 版



◎ 天然の歌

塵の一つもあだならぬ

完全無欲の不足なき

天然界の様見れば

胡蝶も花も草も木も

天然萬物それぞれに

所得ぬ物なかりけり

二

春の廣野に杖把れば

野には色ざる草花や

54 山には匂ふ山櫻

歩み行くさね惜しき草、
枝にさわする椋鳥も
暗きに鳴ける鶯も、
我棲む枝を誇り顔に
聲高々に歌ふなり。

三

眼を底く見下せば
小川に住ふ諸魚や、
君等も神の作りしか

水越し見ゆる其姿
泳げる様の美しくさ、
上に斜に眞下にも
心の儘の身のこなし、
滔々として世は進み
空飛ぶ翼は未だ愚か
今は底行く舟も有り、
されど君等に競べては
如何で及ばん及ぶべき、
55 人の力の届かざる

56 夏さね冷たき水の中
神の御手の巧みさよ。

四

深山に深く分け入れば
枝に止まれる山鳩よ、
君が遊べる野の廣き
搜せる食は無盡藏、
持つたる友の數多き
日々の遊びの樂しさよ、
傍見る我等も羨やまし。

御空は卿等の物ならめ。

.....

尾山の松に掛りたる
彼の隼を君見すや、
彼の持つ爪は鋭ごきも
兩の翅は強く共、
瘦せたる其身を如何にせん
飢れたる腹を何とせん、
遊べる友の少なさよ

57 強きになびく世と云へど、

58 慈愛の神の徳るらん、

鳩や雀の世と見ゆる

樂しき自然を歌わかし。

四

幹は枯れても實は育ち

莖は折れても根は残る、

植物界の様見れば

人畜敵とも見ゆれ共、

迎も彼等の世界ぞや

山野は愚か人の住む、

町の最中の庭にさね
彼等は繁り榮わたり。

五

さても吾等は幸多く

數だに分かぬ生物を、

長く友とし遊ばるゝ

神の慈みに氣付かなば、

鶯啼かす美音もて

樂しき此世を歌わかし。◎



◎人生

隙洩る風の身に泌みて

夜半の魔夢のさめし時、

如何にせば、や人の世は

嘆き病ひ苦しみの

海に命の風受けて、

今日も憂ひて過せしが

光明未だに見ぬなり。

.....

そも人の子は世の中に

62 何を成さんと生れしや、

干す味苦がき蓋の

底に甘露の有らんかと

今宵も遂に酔ひ臥しぬ。

夢か現つゝか幻ろしか

娑婆の嵐は荒さむ共、

忍べ永世の花匂ふ

耽樂の世界は近づけり、

困難に變る樂の地は

我等が前に迫るなり。

◎探勝會の歌

同じ自然の御母の

御手に育ちし兄弟よ、

四方の櫻は春告げり

山の紅葉に秋來ぬと、

いざや自然の我母と

暫し別れを惜しみ來ん。

.....

色様々の春の葉に

青一筋の跡も無く、

63 千紫に染みなす秋の野も

64 自づからなる姿とよ、

花より明くる御吉野や

島又島と色兢ふ

内海の眺めも近かるぞ。

五

棚引く烟雲後にして

波打つ磯や山岳も

此所や彼所と賞たへ來ん、

往古を偲ぶ舊跡や

名高かき近畿の名勝は

今や吾等を侍つてあり。

小事

一 (英詩)

爲すべき事は何んな事であらうとも

それを爲せよ諸君、君の全力を振つて、

決して少しく眞實であるな

或は少しく正當であるな、

さ細な事で

天國へ登る基となることすらある。

66 さ細な事が人の一生を作すのだ、

だから何事に於ても

大きな事でも小さな事でも

君の力の及ぶ丈け充分完全であれよ◎

おまどなみ

等

三

有限田舎ノ用箋

渡野 明

◎我が生地

切り残されし柿の木

の青葉が影も風熱く、

唯見る谷あひ一面に

梁は高くもほこりたり、

水色なせし夏の空

白雲いつか襲ひ来て、

雲漏る日影は峯を越ね

細谷川の音微すか。

68 昔の儘の土の色

歩毎にいや増す懐かしさ、
鳴く蟬いたく身に泌めば
そゝろ思ひ出づ幼な頃、
朝夕遊びし我家や
尋ね來りし友たちと、
楽しく戯れ遊びてし
緑や真垣の影もなし。

.....

さは云へ獨り愛らしや

昔なぶらの岸の岩、
其根に小さく生き残る
岩松連花の其姿
瘦せてはあれど影こめぬ、
祖先が靈は此谷に
今もさ迷ひ給へるか、
亡き父も今此僕が
大きく成りしを喜ぶや◎

山猿這ふ、梢ゑは高し、宇治の瀬や



◎ 櫻 花

花の都の隅田川

春の景色を見渡せば、

満堤花に埋もれて

道は白雲の裏に消ゆ、

十里の長堤雲纏ひ

中に人影ほの見わた、

遠かる木々は招く如

近かる花は語らなん。

.....

咲き競ひたる花々に

朝日うらゝか輝けば、

其麗はしく気高けきは

百花の王と云はんのみ。

日輪森を離るれば

淡紅濃白鮮かに

天日爲に光りなし。

.....

中に可憐の若櫻

淡紅ひの花片に、

口付けなせる小女子の

一枝の花を懐かしき

背子こや見らん玉の如、

美し頬に紅ひの

色を堪わて喜べる。

此方まばらの花間に

早瓢を肩にせし老人は、

霞める空と花々に

あこぶれつゝぞ佇めり。

.....

74 風吹き渡る突堤の

初雪かとも思はるゝ

櫻花散る下蔭を

背廣の軍服着こなして

煌めく劍を支ね行く

武夫の床しさも

花の都を離れては

絶えて見られぬ眺めなん

.....

河を通へる百々舟の

气笛の聲は白雲の

花の中より漏れにけり。◎

(瀬田川)

垣々と、天の流るや、瀬田の瀬は。

田舎の秋

雲千々に、織れ行く妙への、彼の琴は。

いづこの姫の、かなづるならん◎

◎梅が香

花の林の白雲の

梅が下蔭さまよへば、

日は暖かに春めきて

花の香誘ふ春風は

萬斛の星を空に見せ、

寒さ凌ぎて自づから

開きて放つ梅が香に、

浮世の夢は忘れつ

77 恍惚として逍遙す。

78 花下蔭に菴席き

酒くみ交はす夫婦あり。

風吹くなべに花びらは

一輪二輪ひらくと

其盃の中に落ち、

美酒は香り花は浮き

二人は笑みを交はしたり。

.....

塵埃一点梢ををも

浸さぬ老樹の露にぬれ、

中より清よき若梅の

いつかほころぶ白妙に

重なる花の雲厚く。

清姿麗態虞美人の

月下にさまよふ心地して、

三つ四つ五つ、ほゝねめる

一枝をた析れば結ぶ霜

冷たさ骨を透しけり。

驚ろく蝶に導かれ

79 小高き丘に上るれば、

老樹若木のまばらかに
 花尙ほ萬果の星の如、
 月とも見ゆる日は高く
 注ぐウ井スキ一の香にまじる、
 香高き梅が雲に酔ひ
 知らず佳人と成つてけり◎

◎田月

寂しき庵立出で、
 秋月右に眺めつゝ、
 浪花江に立つ葦の葉の
 邊りに明かき月の道。
 彼の青黒き森に入る
 雨の田面は淡黄に、
 早刈入れの稻の穂の
 風なく波と倒れたり。

麓に續く村々は

82 夕霧に低く、襲はれて

今や露置く最中なり、

其霧中に点々と

光るは農家の燈火なん。

.....

遠き生駒の峯續き

其輪郭の空白く、

淡墨色の中天に

高く懸れる明月は

今や此世を照らすなり。

切れぎれに飛ぶ空の雲

三つ四つ高く秋寒く

道の遠くに人の影

其聲早も聞ゆなり。◎



(親しき君に)

み光りで、露が命を、消さねば。

脆くはあれど、支われなん。

◎ 画の精

あゝ、凄しき画の精よ

如何なる御神の生みなせし、

其持つ右手は誰が生みし

され共人の腕なるか、

君が筆には神宿る

君が穂先の鮮やかさ。

.....

画きし青葉は滴々と

85 水も垂れなん深緑り、

86 炎天地低を焦すらん

絶わゝぬ夏の暑き日も、

愛する乙女と二人づれ

こんな涼しき木蔭にて、

手に手を取りて過ぎし日の

同じ戀路を語らば、

如何なる心地やするならん

如何に楽しく有るならん。

.....
画きし小枝は折れもせん

流るゝ小川の水汲みた

谷間の景色の静かさや

積れる雪の冷たさよ

枝に掛れる白雪は

鶯止まるも惜しきよな

凄壯極めし夜半の月

掛れる雲の恐ろしさ

此世に有りこ有りぬらん

極致の景色は寫されぬ

.....

88 歴史に名高かき佛蘭西の

シヤワニューが其昔

振ひし筆も斯くなりし、

君が御顔の見ぬれば

道邊の草や森の木も、

あゝ親はしき我神よ、

妾の姿を今日も又

見て呉れとてか西に吹く、

空吹く風も如何にせし

君の見る間は暫し止み、

川の流れも真夜中の

牛の時刻の來たらぬに、

君の見入れる其間隙

永久惜しき身を休む。

.....

老ひし歌人の仙境に

楽しく歌ひ行く様は、

僕も成りたや卿が身に

得意溢ふるよ羨ましや。

89

君が画きし彼の美人

90 何所の誰れを寫せしか、

花の顔ばせ月の眉

立ちし姿は芍薬に、

幼な時より今日迄も

未だ得會はぬ彼の姿、

僕若し神なら帶止めと

成つて細腰抱きたやな、

明鏡と成つて何時迄も

彼が顔ばせ見まほしや。

.....

◎終業時

室内いつか騒がしく

そこやあそこに吏員等の、

倦みし體を友びこの

机に重くもたれたり、

此所には重き手を突きつ

浮世の事を話すなり。

壯重なる課長の其前に

今し集ひし年若き

91 三人の書記はこもごもに、

明日の旅出の探勝會

道は大和路立田迄

如何なる仕度ぞ程よきと。

或は瓢を腰に下げ

赤き毛布を携わて、

山一面の紅葉を

賞へつ汲むもよからずや。

或は鄙に飼ふ鶏を

其地の茶屋で煮き來させ、

紅葉が下のもみじばを

集めて焚いて酒温め、

画や文ならぬ眼のあたり

紅葉に酔ふも如何ならん。

.....

老ひし課長は嚴そかに、

それも元より非ならんや

され共余輩が思ふには、

各自に酒肴を携へて

今や盛りの紅葉の

谷又山にとつおいつ、

94 昔の画にある唐國の

十六羅漢を其儘の、

程よき處に座を占めて

互に呑みて歌はなん。

話しは何れに決せしか

漸て終業の四時鳴れり◎

◎ヒマラヤ山麓の夕陽

遠き昔は釋迦牟尼の

生れ給ひし靈場なる

ルービニワナーの秋の暮、

今は昔に變るれど

昔ながらの山と水。

寂しながらも村々の

集むる家は烟立ち

樂しき秋の光り見ゆ。

96 果てなき麓見上ぐれば

天に聳ゆるヒマラヤの

遠近山は萬年の

雪凱々の峯凄く。

遠く彼方に天を磨し

早入合の西の空

大空覆ふ紫の、

果しも分かぬ巨幕と

怪しむ雲が其影は

現つや真北に立つてあり。

.....

入日の送る赤き日は

峯より峯に照り渡り

壯絶偉觀の美しくしさ、

此世の眺めと思はれず

高き神世の世界なん。

.....

中にも抜ける一峯は

世界第一エヴェレスト、

97 次いで高きケンチンヂ

98 あれも世界で第二とぞ。

谷より溢ふる清川は

彼の峯雪の解けてなん

此川裾はガンジース。

.....

谷間くくに咲く花は

世に珍らしき花のみぞ。

彼のソロモンの榮華なる

花の花なるスラミトも、

此天然の野の花に

如何で兢ひて及ばなん

僕は覺わす酔ひ臥しぬ。

.....

遠くおぼろの夕霧が

中に懸れる瀧津瀬は

變れる姿様々の

美しくし山影映すらん。

此空覆ふ峯々が

其谷々の秋の色

99 何れ劣らぬ壯觀さ、

100 世界に数なき勝景と

見て來し人は云ふなめど
未だに知らで残されぬ◎



◎立田姫

清き流れの清瀧の
淵よりは細き谷を出で、
見渡す限り廣き野に
早ほの見ゆる紅ひは
其名も高き立田川。
さすがは古き奈良朝に
賞でたる姿のまゝなるか、
岸廣々そゆたかにて
黄ばみそめし芝草の

101

102 中より優しき若楓。

高く根ざせる老木は

廣く枝をば翳しつゝ

梢わくゝに燃ゆる火の、

今を盛りと紅ひを

兢ひて色濃き深錦。

.....

夕日に匂ふ紅葉の

其下蔭にさまよへる

佳人も赤き衣にて

芝生も今に燃わんとす。

そよ風枝を揺がせば

紅影水に亂るゝは

赤鯉の游鱗する如く、

紅ひの濃き一葉散り

令嬢の気高き後れ髪

かゝりて見返わる顔赤く、

吾れ人共にはゝねみぬ。

前なる岸の楓林も

103 見渡す限り遠く迄、

水と空との其外は
紅ひならぬはあらぬなり。

.....

岸より岸に横たへし
橋の半ばの欄干に
もたれつ四方を眺むれば。
紅葉の中に見え初めて
紅葉の裏に流れ消ゆ
碧瑠璃色の水早く。
彼の亂杭に堰かれつゝ

瀧なす流れは騒ぐとも、
水泡の花白妙に
咲き匂ふ邊り紅ひの
蝸巻くあるも見ゆるなり。
吉野初瀬は知らね共
紅葉は櫻花に優るなり。
橋畔に高く青々ど
緑りの松は染むが如、
樹間より泄る醉人の
亂れし歌の聲曇り、

枝より枝に疲る風
流れに和してさやかなり。



◎饗庭野の春

空の霞は棚引き初め
朝日のごかに東の空より
まばゆく森の上に懸りたり。
廣野は遠く限りなく續き
青々たる若草隈なく満ち渡り
若葉吹き初めし灌木所々に立てり。
西北は若挾越前の境となる
大山脈の遠く此野を空に迄圍み、
東南は直に洋々たる

小波打來る琵琶湖を見下し、
竹生島近く綠色なして浮む

此所ぞ北江洲饗庭野なり。

遙か彼方に低く流るゝ谷川は

野の緑に所々遮切られ白く光りて見ゆ。

此光景に瞳がれつゝ僕は

スケツチ手にして茂みが上に腰を下しぬ、

曉季の世に生れし塵埃の如き僕も

又何をか憂ひ悲しむの要有る、

永久溫和に僕を待つ此山水の有る故に。

寂莫たる浮世に苦しみ年老けし僕も

汝が顔を見て初めて若返る。

汝が顔ばせは美人の如く寸微を苦にせず

眼界是皆汝が顔なり、

我身も今や汝が上に在り。

極美は殘酷にして人を殺すと

されど汝は溫和にして我に生を與ふ。

.....

峯を掠め來りし白雲は

此野の空にて千々に碎けて霞と成れり

森より森に飛び傳ふ鶯は
 面白くホーケキヨと鳴き、
 谷川傳ふ間風に誘はれてか
 河鹿もがらくと鳴けり。
 日光の温かきに喜びて
 芽立つ若葉は躍りて見ゆ。
 そよ吹く春風に吹かれつゝ
 座れる僕は再び思ふ、
 昔芭蕉や西行も曾て此野に遊びしか
 否道遠く名も無かりし廣野故來らざりしか。

年こそ遷りて隔ちたれど
 命長き此山水は未だよも變るまじ。
 彼の谷川も矢張り彼所を流れたか
 川邊の巖も昔の儘なるか、
 此絶景は昔より風流の人のみならず
 匹夫野人の頭べを幾度か返せし。
 已に昔人此絶景を我等に遺し去る
 我も又分れ難き汝を遺さるべからず、
 嗚呼天然の大景よ我は汝を愛し慕ふ
 汝は果して我を愛するや否や。



◎須マの浦

寄せに寄せ来る浦波は清く

白砂奇麗にきら／＼光る、

廣く續ける青松は磯ざわ迄も迫り

潮のしぶき身に泌み涼し。

淡路島彼方に青く夢の如く浮み

沖を急ぎ漕ぎ行く漁船の

舟歌微かに面白く聞ゆ、

遙かに烟を立てる黒船は

何處をさして急げるか先きより見ゆ。

114 手に手を取りて二人の中は温かく
美し君は語るよう、

「貴郎と一しよに浪花江に

來ましてからは早二年せの

楽しい月日を送りましたがねー貴郎。

浮世の嵐は荒くして

未だにこんな奇麗な絶景を

朝夕眺めて暮されません、

東じや隅田の傍りと云ふけれど

私しは今日來た彼の道の

香爐ほとりの濱にても

せめて一屋立てゝ住みたいわ、

そして貴郎を銀行に通はして

私しは内に針仕事、

貴郎が御歸宅の其時は

琴三味線や茶の湯して

長き來ん世を送りましょ。

とは云ひながら申し貴郎

さすがは須磨の浦ですのう、

126 其の大きな山の美しくしさ

ほんごに画にもこんな景色は有りません
 山一杯に彼んな大きな松繁り、
 冬さね青き常盤木の
 變らぬ眺めが宣しいわ』。
 僕は怒れみ語るよう

『二人の未來は長い故

そんなに行く手を急ぐなよ、

僕とて早に成功して

身儘氣儘に成るなれば

此須磨にでも住めるわい。

お前がそんなに山水が好きならば
 此秋からは西の宮
 香爐の濱に奄りして
 樂しき月日を送らふよ』。
 『貴郎も賛成下さるか
 二人の未來は樂しいね』。

働け

(英詩)

織れよ、同胞、織れよ

働くは我等の事、

118 されど働くは人の命

人は果實を集め、人は花を集め
人は又た種を播く。

英國の國王より

土を堀る百姓に至るまで

もし己が勞作にいそしまぬときは、

四季それぞれの楽しみ

半ばをも知る者よもなけん。

◎千島海岸

海原遠く見渡せば

荒波高く叫びたる

果ては大陸滿洲か、

左は海原右は崖

續ける磯は荒岩の

積み敷かれたる其中を

打寄す大波碎けたり、

空は晴れても塩臭さき

海邊を一人飛びつ行く

獵夫は已れの若い時。

.....

燦めく銃を提さげつ

段々此方に來て見れば、

浮きては見ゆる鴨の群

幾百千とも數分かず。

岩根を傳ひ隠れ寄り

遠矢に討たんとしてけれど、

持つたる銃は三十番

彈はゾービー込め有れど

逆も仕止むる見込なし。

一發ドンを放ちしが

何の變りも有らばこそ

鴨はやつぱり浮びたり、

續いて二發討ちたれど

近くの數羽が立ちしのみ。

吠ゆる嵐に打負けて

大なる自然ぞ進み行き、

人の力のはかなさよ。

.....

彼方の沖の岩の上

白き大鳥集ひたり

ゴミとて大きな鷗なり、

實彈込めて近くより

討てばふわりと波の上

浮びし儘に羽ばたきす。

水の深さは浅くして

脛の深さで拾ひたり、

鳴や千鳥は數知れず

岩より岩に飛び遇る。

.....

歸りの途は崖の上

苔や木賊で敷かれたる、

大窪原に出でにけり

山鶺二三羽飛び立ちぬ。

馬は此野に放し飼ひ

人の姿も知らぬ振り。

.....

歸れば擇捉紗那の村

我が日の本の果なれど、

あな、なつかしや巨燧あり、
女の尻に狐皮

長く垂れしは座る時

腰の冷ねざる爲とやら。

鵒の油は耳薬り

乙女は已れの鵒を取り

火鉢の上に掛けにけり。○



◎シスカ河

風にゆらく枯木立

立てる並木の其中を

親しき君と連れ立ちて

歩む靴音しめやかに、

緑り色濃き苔の中

叢立つ常盤木愛しつゝ、

聞くさね寒き樺太の

北に名高きシスカ河

河の邊りに近づけば、

堤を覆ふ枯草の

今は斜に敵よぐのみ。

.....

友は狼狽てつ手招きて

彼れなる岩が根君見すや、

確かに鴨の泳ぐなり

君行き早く討ち給へ。

見れば嬉しや鴨の群れ

数は百をも超ゆるらん、

堤に添わる熊の跡

たごりつ淵邊に潜みよる。

茅の隙より見下せば

眼下に見ゆる嬉しさよ、

折から輝やく秋の日は

群鳥が上に一際の

明るき光りを送りけん、

可愛ゆき目や首や羽根

紫黄や清白の紋

まばゆき程の美しくさ、

泳ぎ佇すみ水浴びる

128 卿等の遊びの楽しさよ。

歴史に名高き埃及の

クレオパトラを浮べたる、

白金擢を羽根とせし

燦爛たりし快艇も、

神の造りし此舟に

如何で及ばん及ぶべき。

人里遠き此河も

平和の神は見そなはす。

.....

我手は何時か銃持てり

我腰見ればカイフあり、

おゝ吾れは獵夫なり

獵夫に涙は禁物ぞ

心を静め良く狙ひ

水と空とに打ち放つ。

寂莫破る轟ろきに

平和の夢は壊たれて

彼方へ十羽此方へ二十

129 阿修羅の空と成りにけり。

斯かる光景もまた、く間
 又も平和の静かさよ、

岩根に押し寄す小波は

漂よふ鴨の屍を

十と三羽を浮べたり。

友と吾れとは喜びて

岩角傳ひ下り行き

漸く拾ひ上げ終ひぬ。

.....

酔ひしが如き君と僕

並未杯ホホも夢現つゝ、

流れ落合ふ無名宿

野中の天幕に歸り來ぬ。

先の獲物の川蛙と

空の横木に吊り添わて

夕餉の仕度に掛りたり。

ゆ快な君は語るらく、

「昨日の魚や今日の鳥

數千年の其昔、

大古の暮しも偲ばれて

誠に諒快に有りつるよ、
 體は丈夫に食甘し
 垣々たる流れを打守り
 嗚呼面白き此世かな、
 我住む此野の廣きかな。
 草は黄色に土黒く
 河の流れは清らかに
 枝には楽しき小鳥鳴く、
 金波銀波と夕ばねの
 照らす渚に我舟は

主待ち顔に深へり。
 シスカ河畔の夕まぐれ
 空は宿りの雲遅し。



年たつ今日は富士の嶺も
霞むが如く見々にけり、
人の心も浮き島の
原にぞ田鶴は舞ひ遊ぶ◎

◎熊狩リ

風にそよ／＼柳の木
ゆらめく邊りを唯二人、
道さね有らぬ樺太の
ホロナイ河畔の芝生をば
踏み分けつゝは進み行く、
河の曲りも數過ぎて
眞晝に近き頃となる。
河上遙か見渡せば
眞黒き影の河原に、

136 伴側ふ物はまがふなき

此地に名高きヒ熊とよ。

二人はライフル提げつ

柳が蔭を小走りぬ。

.....

來りて見れば彼の熊は

下の渚に首を垂れ、

手近を泳ぐ鮭や鱒

片手で砂地に跳ね出しつ、

ぱく／＼食ふ顔かたち

げに恐ろしき姿なり。

.....

寸時の猶豫も今はなし

狙ひ定めて射ち放つ、

うなれる弾は忽ちに

狙ひ少しも過またず、

今迄知らず立つてける

彼の巨熊を仆しけり。

牛にも似たる此熊も

137 此高原に住へるか。

.....

二人は直に引返し

夕方近くに舟を着け、

肉と皮とをしほ漬けに

舟の中へと貯へぬ。

河の流れは消々と

月は梢を離れたり

裏れに涼し今日の夕◎

山縣公

上

(琵琶歌)

黒雲天に漲りて、志士は東に又西に、浦賀の沖の波
 白く、世は今よりの暴風雨なん、頃は天保成成の春、
 浦波静かな長洲の、萩の濱にて世の中に、可愛ゆき
 生聲立てさせて、元師山縣公は生れ給ふ、父三郎殿
 と母君は、玉よ花よとこたて給ふ内、流る月日は杉
 の戸の、早十三戈に成らせたり、竹馬よ獨樂よと世
 の常の、幻な子供と變らねど、何時かは匂ふ梅檀は

早二葉より香ばしく、此年若き冬の夜、

「窓近き竹の嵐は音絶わて、

月影薄き雪の曙」。

歌はせ給ひし賢こさよ、御年十七歳の時、郡奉行の書役に、就かせ給ひて世智辛き、浮世の嵐に帆を上げさせぬ、人も知る吉田松蔭が門下にて、學びしも此頃なりしとかや、時しも漸く幕府は衰わて、浦賀の暴風雨風ぎ止まず、尊王讓夷を楯となし、右手に刃を隠したる、強藩四方に現はれぬ、公が祖國の長洲も、三百年の其昔、彼の國が原の戦ひあつてより、

恨みは積る徳川家、今は幕府と崇むれど、元は同じき諸候なり、如何で倒して倒れざらんと、まして此頃の暴戾を恨みたる、血氣に逸りし武士共、大殿圍み獎め立てり、毛利の公は遂に動かされ、都に軍を徴行させ、あやに畏こき天皇の、大御命を乞ひ受けて、時は元治元年七月の小夜、會津桑名の兵の守りたる、所謂九門に不意に攻め寄せぬ、敵は名だゝる荒男國に、武道銀わし武夫のみなるに、思ひも寄らぬ薩藩さね加はりて、狂ひに狂ひし毛利勢、一夜明けにし頃ほひは、裏れもろくも破れ果にけり、中に

長洲切つての名士なる、久阪、來島諸勇士の、討死せしぞ是非もなし。

中

頃しも公は生國壇の浦なる、高く築きし砲臺に立て籠り、快傑高杉晋作と身を碎き、敵に鍛わし名も高き、奇兵隊なる其中の、砲兵隊を指揮しつゝ、讓夷の鋒に怒りつゝ、沖に攻め寄す外國艦に、砲火を交へ戦へり、我の討ち出す彈丸は、敵艦迄は届かぬに、敵の彈のみ猛烈に、我砲臺をこぼちたり、勒か二日の激戦に、馬關は遂に敵に墜ち、公は重傷受けて

逃れたり、講和の役は高杉を始めとし、伊藤、井上外數氏なりき、談判宜きに運ばれて、暫し平和の月を見ぬ、時しも幕府は再び大軍狩り集め、二度の長洲征伐となりぬ、今の徵兵制度の源なりしと云ふ、庶民の子弟を鍛わたる、奇兵隊をば公自から引連れて、最早四境に攻め寄す幕軍を、神出鬼没に打碎き、其銳ごき働らきは神の如く、寄せては返す片男波、散々敵を破り散らしたり、さしも多勢の幕軍も、逃げ退くの外道は無かりけり、是こそ後と成つては徳川の、長き天下を覆へしたる、其原動力とは成つた

りとかや、此戦ひの最中に關西隨一の、薩藩との締盟も成り立ちて、土佐廣嶋や肥前さね我に従ひ、幕軍退きて間も有らぬ、慶應三年十二月九日の日は、早大革命の遂げられて、幕府は遂に大政を天皇に還し奉りぬ、忽ち伏見鳥羽の騒動も、我官軍の勝に歸し、續いて起りし東征に、曾ては天下の兵を壓したる、千代田の城も南洲と勝海洲との、二傑が折衝宜きに適ひてや、一矢も交わす我軍の手に歸しぬ。

下

されど幕府の恩に死すべしと、會津若松長岡等の強藩は、少しも恐れず我命に叛き立てり、續いて進む東征に公は越後潟、長岡城に押し寄せて、不敵の智將河井繼之助の學ゆる大軍と、秘術を盡し戦へり、さすがの公も此役には、しごろもごろに腦まされ、貴とき孫吳の兵法も、互ひに用ゆるも役立たず、年の半ばは勝つべき術も無くて戦へり、援軍仁和寺宮の御着馬有りし其時は、公は一旦總司令の職を辭し奉りき、されど宮は遂に御聽許ならせられず、止むなく又も將となり、強く鋭く攻め寄せぬ、さしも

の敵も力盡きてや我軍の、再び長岡城を攻め落せし其時は、一敗地に迄まみれ果て、敵將河井繼之助も、傷つき遂に死せしとや、今は聞く公一代の苦戦こそ、此役にて在はせしとかや、越後口の敵強しと聞き知りて、海路を急ぐ南洲の、越路に着きし其時は、公は勝ち戦さに勇む頃なりき、此時南洲語るよう「さしもの卿も腦まされしか、なれ共ようも勝ちしよな、あつばれ奇兵隊の隊長殿、行く手を急がしすまね共、卿は是より再び軍勢引き連れて、我別道隊の攻め入りし、會津の城に打寄せ給へ」と、惜しき袂

を分ちたり、行く／＼津川口高田驛を攻め落し、若松城に近づきし頃、會津は已に落城との報らせ有り、公の喜び如何計りなりけん、此所にて公は斷つて職を辭し、鳳輩江戸に御着御有りしを見届けて、故國長洲に歸り給ひぬ、されど朝廷公に待つ有りてか、魯佛へ軍事視察に使はされぬ、歸れば兵部大輔に任せられ、苦心慘愴の効勳現はれて、廢藩置縣を始めとし、四民を基礎の徴兵制度も確立させ、廢刀令も公が申請に基づきしと、分けて君が心愴碎きし兵制は、改革又改革と、精良極めし甲斐有りて、公自

からの華ひたる、げにや日清日露の戦役も、連戦連勝の我軍が、勝ちにし力の水上は、公等が策の過またず、強く鍛ひし故なりとぞ。

今は日出づる東海の浦邊に、樂しく餘生を送らせ給ひ、政令一に公の指揮を待つ、元老中の元老と成らせ給ふも御手づから、造り招かせられし徳ならん、げに我陸軍の親なりと、千代經る世まで親はれん。



◎小さき足

二つの小さき足は、
汝を愛づる此手の中に揉まる。

浮世が神秘の土地の縁なる
未だ試みられざる二つの雅しき足。

肥わて柔らかく四月の香ばしき日の

梨花の如く

桃色なる是等が、

如何にして世の荒き路を

縁取る薊蕪が茂間を歩み得ん。

.....

是等の白薔薇色の足は
 疑はしき末來に沿ひ
 婦人の荷をになふべし。
 悲しき哉婦人は最も重き荷を持ち
 最も難義なる路を歩むが故、
 我在世の間は愛は彼等が前の路を
 凡て奇麗に滑らかに美しく、
 唯薔薇のみを其所に咲き匂はせ
 薊蕪を抜き去りやらん。

併し母の注意深き目が
 人の眼より隠くれ、
 汝が妾の指導無く残さるゝ時、
 誰が汝を導くならん。
 如何に彼等は誘はれ
 迷はされ欺かるならん、
 衷れなる小さき未だ教わられざる足よ。
 如何なる淋しき迷路に
 汝等はさ迷ふで有うか。

如何なる危険に汝は遇ふで有ろう。

.....

彼等は悲歎の涙多き深谷に陥りて
暗き木影の中を

盲目に踵づきながら行く事にや。

或は日光の決して失せざる

平和の美麗なる

高き山腹を見出すならんか。

又彼等は下界の上なる

高き高名心の頂を、

膝まづきながら上るだらうか。

或は或名も無き谷に安全に被はれ

愛ご手を引きつゝ歩むで有うか。

.....

怪我なく世の路を歩み

唯樂しき路のみを見出す所の或足が有る。

此世は唯樂しき日の

一循環で有る所の或足が有る。

乍併彼等は極めて僅かで有る。

希望も朋友も無く歩み

154 彼等の旅行を

苦痛と損失にて充ちたるを気付き、
寧ろ早く死に達せん事を望む足は
遙かに多く有る。

.....

美しき顔せる雅しき眼せる
可愛らしき此世の來客なる

彼女の其汚れざる足の前に、

浮世の荒き路が

左様に珍らかに廣がれる所の彼女は、

さて如何なる心地なる。

嗚呼誰が未來を知り能ふか、

我々の愛子の爲に我等は

凡ての良き祝福を欲し、

叫び飛ぶ彼の鳥さへ養はるゝ

空なる神が

我稚子の足を導かれん事を祈る。◎

楽しい春

ハイネ

たのしい春がやつて来て
 いろいろな花が開くとき、
 そのとき私の胸からも
 愛の思ひが萌へ出した。

.....

たのしい春がやつて来て
 いろいろな小鳥がうたふとき、
 そのとき彼女の手を取つて
 私は揺ゆる思ひをうちあけた。

◎死したる精兵

大隊の右なる

佛軍の一精兵、

投鎗のきらめきと共に

彼が鍔の鎧は貫ぬかれ。

彼が胸は英人の血にて

彼の額は英人の呼駁にて

濕ほされたり。

彼の死顔は尙英國に敵つて

勇ましく仆れ居ぬ。

.....

敵は彼が心の
軍帽を造りき。

敵は彼れが

中割れ帽の形の如く、

幾度も彼が心を

切り放ちぬ。

されど切られし一半は

各々聯隊を思ふ心なりき。

其顔には後日の

彼が母國の三色國旗を現はしは、

其唇は青く頬は白く

帽は赤かりき。

今や嗷吠は鳴りひびき

聯隊は彼方に列を成せり、

そして精兵は死して有りき。

.....

老指揮官は除々に

隊列を乗り過ぎぬ。

撃たれたる側面の

其歩行の如何にも短かゝりしに驚けり。
月光は怪しげに

残兵の影を地に落し、

戦ひは已に其最も美味なる

血酒を傾け去りしなり。

陣營の火は幽れいの如く

人影を地に投げ、

残兵は皆老兵の成す如く

直ちに疲れし身を以て

空所を塞充しぬ。

.....

老指揮官は王旗を先にしつゝ、

再び前に現はれぬ。

彼が手の松明は明らかに

青鐘像の如き

戦士が顔を照らし、

彼等が目先に

鎗の光りの如く輝やきぬ。

老指揮官は帽を脱ぎて

激そかに口を開きぬ、

「旗手よ生者に

王旗を下げて禮せよ、

鼓手よ死者がために

吊ひの太鼓を音抵く打てよ、

こは皆我王が御心なるぞ」。

.....

三度び王旗は抵く翻わされ、

三度び太鼓は抵く

吊者が制裁なき希望を打鳴らされたり。

「汝雲よ再び抵く翻りて

生者に挨拶を述べよ。

汝等太鼓よ再び悲しめよ、

其が荒野のラケル「歎く人」にて、

此所ぞ天幕の中の

ラマ「歎きの場所」なるぞ」。

.....

「接近せよ、右へ詰めよ、」

老指揮官は呼ばはり

月下に彼等はあつまれり。

103、
正午の太陽輝やく下の

164 人影の如く

生者は各近づき寄りぬ。
各兵卒の右なる顔は
不知の人なりき。
あな恐ろしや戦ひの荒き仕事は
破れ荒されたる列の
最後迄皆斯くなりき。
影なき死者の聖のみぞ
右に立ちき。

.....

165

萬物死したる如き沈黙の中に
曹ちようは名徳を呼び上げぬ。
消へ行きし魂を
彼が呼び返せし時は
其名は列を下へ／＼さまよひ行きぬ。
友情有る山も其名を聞きたるか
静かなる荒地を通して
其語は影を投じたるか、
寂しき隊に沿ふて走りし名を捕へ得て
大なる山心に迄抱き込み、

166 再び微かに其聲を

人々に投げ還したり。

.....

破れたる隊は依然として突立ち
曹ちようは名簿を呼び続けぬ。

死者の名が呼ばれし時は

又列に沿ひさまよひ行きぬ、

死して黙せども獅子は偉いかな

精兵に代つての聲は

鼓聲の如く列外に鳴り出でぬ。

「此所だつたぞ」と強く答へ有りき。

.....

兵士等は胸抑へ切れず叫び出しぬ。

「彼は立てり彼は常に

我老隊の傍らに立ち居たり。

吾等は何時迄も彼を保護せん

曹長殿最一度明らかに名を呼び給へ

されば彼が功績を知らせましよ」。

曹長は云ひき。

167 「精兵トラーレは如何せしぞ」。

「彼は名譽の戦死をしました」と
 皆の答へなりき。

.....

君等は断じて彼が死せしと云ふべきか、
 其墓場より
 歸休の許しを得て出で來り、
 永遠靈的歸隊の報告を成す
 此壯大なる威嚴をば。
 地球は小さき太陽と雨に
 野菊を任かせ、

幾百千年の瘵せ疲れたる
 時代の過ぎ去る間、
 良く此勇者共の靈を
 其根に保ち得るや。

.....

嗷吠を懸けよ
 復活の司樂イスラエル。
 空なる神の愛する
 天使のらつ呷手よ。
 此破れたる戦場の下には

汝の呼出を何者も待たざるぞ。
彼等は昇天し

右方に雷神を眺めつゝ

世と並び進み行かるなり。

世は彼等に告別の辭を送りたれど

彼等は永遠世に向つて

『お早う』の挨拶を成すなり◎



◎ 雉子狩

鶏鳴く聲に夢さまし

獵衣手軽るに身に纏ひ

十番二連を肩に掛け

手籠の獵犬引連れて

獵の門出の勇ましや。

霜の劍を踏みしめつ

紅かき束雲たよりにて

野道を急そぐ一人旅、

犬も勇めば狩人も

172 希望に溢てる胸持ちて

今日の狩場を夢みつゝ、
斯くや打なん斯くせんこ
歩める足の其軽こ。

.....

霞める空は晴れ渡り

微かに風は吹き戦よぐ、

永遠輝やく天日は

連なる山の峯照らす。

前に横たふ草山は

過ぎし日曜に打損じ

無念残れる山なるぞ、

今日は中々逃さぬこ

野邊の細道急ぎけり。

.....

エスは早くも臭ひ付き

五六歩山に匍ひ込みぬ、

喜こび狂ひ尾を振りつ

得意に進むたのもしさ。

吾れは思はず銃を把り

息を殺して従ひぬ、

エスは次第に身をあせり

彼方此方と尋ね行き

彼所の芒きの茂みにて

はつと睨みつ驚きて、

二三步低く後じさり

姿や見ぬぬと葡ひにじる。

時來にけりと勇み立ち

静かに傍に歩み寄り、

銃は水平に右脇に

足は確かに踏みしめつ

「行け」の合令はつるの聲

エスは堪らず飛び込みぬ。

.....

犬の姿は見ぬぬ共

草は折れ行き穂は騒ぐ、

寂莫なりし奥山も

今や色のき渡りたり。

騒げる胸を静めつ、

今かくと侍つ内に、

けたましましき羽音に打連れて
 勇姿を現はす雉子のをす
 をもき體を支ね兼ね、
 漸やく出づる二間餘
 瞬間ギロツと見週して
 正に彼方に去らんとす。
 何時にか雉子は銃に乗り
 夢にや落ちし引銃は
 死出の旅路をせき立つ
 弾は命の使者と成り、

響然の響きと諸共に
 衷れやもろし山の鳥
 もんごり打つて落にけり、
 散にし羽先はゆらくと
 風に任かせて飛び去りぬ。
 胸の騒ぎの消ねもせで
 又も聞ゆる羽根の音
 ヒューが混ると思ふまに
 鳥は遣はす雌なりき
 緋いて羽飛び出でぬ。

込み替へし門は手に應へ
 ドンドンと釣籠打ち
 二羽は美事に落にけり
 一羽は遂に逃げ失せぬ。
 吐出せし烟は顔を覆ひ
 犬は勇んで吠え立てつ
 谷まに響びく山びこも
 遠くに遠く消え去りぬ、
 三羽は暫がて一羽づゝ
 エスが口にて運ばれぬ

嗚呼此時の壯快さ
 何に例はん例はん
 身も世も有らぬ心地して
 得意全身に煮え渡り
 思はず茂みに打倒れ
 シガアの煙に吹かしつゝ
 「廣い浮世に誇れる物は
 おれの山狩る此腕よ。
 おれの仕込か此エスの奴
 鳥追ふ跡の鮮やかさ」

一時枯草を寝衣とし
疲れし體を横たへり
左手には息せく犬を撫せ
右手は掴める菓子を與り
暫し茫然と打臥しぬ

氣付けば日影は未だ早し
いざや行かなん山深く
かすこの高原に出でなんご
谷ま傳ひに辿りけり

背負ひし獲物はをもけれど
さやけきこゝ地に打忘れ
錘かと思ふ枯草を
すたく／＼軽く踏み行きつ
眼を低く見返せば
さつき憩ひし草原の
麓は遠く隠れたり
鞋は何時しか濕り來て
前は一面の苔の谷
エスは彼方に立進む

182 獲物は近くに住むなるし

いざや今度も逃さじと

銃を提げつ従へば

まもなくエスはポイントす、

今度の鳥は何ならん

ユラ／＼スーと飛び立つは

珍らし大きな山鶉だ、

矢庭に打出すドン／＼で

やつこに彼を打臥せぬ。

哀れの彼は逃げもせず

走るに足はあらぬかし

狼狽せず騒がず苔の上に

可愛ゆくじつこすくみ居ぬ。

虎狼の眼にも涙あり

我れはさりとも撃つべきか

汝は生くべく生れたり、

鷹や狐や病ひにて

失ふ命や常ならん。

183 我手に掛るは行く先も